

のではないがささやかなヴィジョンをもっている、それに向って進みたいと思っている。

私が現在まずまず恵まれた老後を送ってい

るのは、偏に母校に学び、且つ長期にわたって勤務したお蔭であると思うとき、亡き父母や姑、夫に対する感謝の念を禁ずることが出来ない。

## ソグネフィヨルドを訪れて

小池 とみ子

1996年夏、ハーグで開催された国際地理学会に参加した後、デンマーク、ノルウエーと北欧の国々をまわる機会を得た。オスロでレンタカーを借り、山越えてソグネフィヨルドを目指した。ノルウエー最大のフィヨルドの谷間の暮らしの瞥見を報告したい（地図参照）。

<フィヨルドへの旅の始まり>

オスロから北へE16号を進む。道路はU字谷に沿っていて、時々氷河湖が現れる。山がちな地域に入っても道はそれほど急にはならない。少し平地が開けてくると畑が現れる。大麦らしい。スプリレン湖のほとり、ネスで小休止。このあたり、じゃがいもの花が咲いている。たまにスプリングラーが回っている。バス停はあるが、バスはほとんど見かけない。あちこちキャンプ場になっている。たまに牛の放牧を見かける。

氷河の谷はだんだん険しくなる。切り立った崖、周りにU字谷、圏谷がよく見える。ヴァンの対岸の山にはじめて氷帽を遠望する。山地の高いところには羊が放牧されている。

4時頃ボルグンの木造教会に着く。1150年頃建立されたというノルウエー最古で最も美しいといわれるもので、世界遺産にもなっている。さすがにここには観光バスが2台来ていた。まわりは小さな木板をぎっしり張り巡らし、するどい屋根の線が天に向かって伸びている。内部は簡素で祭壇があるのみ。なかなかとは思ったが、二人で100クロネ

(2,000円)はあまりにも高い。ノルウエーの木造教会はキリスト教が広まるとともに13～14世紀頃南部の山間地へ移住・開拓した人々によって建てられたもので、19世紀後半生活の厳しさから彼らの半数近くはアメリカへ移住してしまった。山間地に今もいくつか残っており歴史的記念物になっている。

道はレールダールの谷に沿って下る。ようやくソグネフィヨルドの西端に着く。ここをフェリーで対岸に渡り、フィヨルド観光の中心地ソグンダルを経てヘルマンズベルクに宿を取る。ホテルは半島部を占拠していて視界ぐるっと海、暮れなぞむフィヨルドの海はまるで幻想の世界である。はじめてフィヨルドに立つことができた。

<ソグネフィヨルドというところ>

ここでソグネフィヨルドとこの地域の経済について文献によって調べてみよう(John, 1992他)。ソグネフィヨルドは長さ175km、最大水深1,300m、水面からそそり立つ山々は600～700m、谷幅は最大でも5km以下でノルウエー最大のフィヨルドである。沿岸沿い、特に日向斜面の北岸に中世からの村や集落がある。

次にノルウエー農業についてであるが、耕地は90万ha(1994)で耕地率は2.8%にすぎない。経営面積は10ha以下が77%(1972)を占め、小規模農家が多い。作物は、表にみるように干し草が圧倒的に多く牧草が最も重要な作物である。主な農業地域は、沖積層があ

り小麦や野菜・果樹の栽培が行われているオスロ付近、低温に強い穀物の栽培や酪農が行われているトロンハイム周辺、そして移牧による牛の飼育を主としてきたフィヨルドの谷間がそれである。

フィヨルド農業の土地利用は、3つの部分からなっていた。集落の近くにある耕地（インマルク・内側区域）、谷間にある薪やフェンスの材料を得る林地、そして耕地の境界を越えた谷の上の方に広がる山の共同放牧地（アウトマルク・外側区域）である。アウトマルクには麓の牧場と山地（フィエル）牧場があり、農家はそれぞれの牧場に山小屋を持っていた。春にはまず麓の牧場へそして夏には家畜を山の牧場に移動させ、自らも山小屋に移りミルクをしぼり、バターやチーズを作った。冬は干し草による舎飼いとなるが、干し草は夏の間耕地で栽培されたものである。この移牧方式の生業だけでは十分ではなく、フィヨルドでの自給的な漁業や山仕事なども行われていた。

#### <フィヨルド地域の変化>

1960～1970年、フィヨルド農業は大きな変革の時期を迎える。北海油田が開発され、石油輸出国としてノルウェーの経済が大きく発展する時期であった。近代化の波はフィヨルドの奥までひたひたと押し寄せた。耕地の統合、輸入肥料の使用、トラクターの導入などによって農場の合理化が進んだ。同時に若者の流出が起こった。地域の農業を維持するために、政府は積極的に酪農に補助金を投入するようになった。インマルクの干し草の生産は増加し、夏の間農家の近くで牛を飼うことができるようになった。アウトマルクは今日ではほとんど使用されなくなった。放棄された牧場には灌木が生い茂っている。共有地は個人所有に換えられつつあり、一部ではエゾ松の植林など新しい型の林業が始まっている。この地域の伝統的なフィヨルド農業は大きく変わった。現在の経済は主として酪農（生乳）に基礎をおいている。村には新しい畜舎やサイロ・トラクターなどが次々と導入さ

れている。

もう一つこの地域を転換しつつあるのが政府観光局による観光開発である。フィヤールトンネルの建設、フェリーサービスの充実、新しいソグンダル道路など交通革命と言うべき状況がある。また氷河博物館の開設やキャンプ場・ヒュッテの整備も行われている。1980年に約8,000人だった観光客は1995年には約27万人になった。観光がもたらす収益がむらの経済を豊かにしつつある。

近年氷河による水力発電を利用したアルミニウム精錬工場が東部のオーダルスタンゲンと西部のヘイアングルに出来、人口2,000以上の新しい町が登場した。

#### <氷河に触れる>

翌日、ソグネフィヨルドの北に広がるヨーロッパ大陸最大の氷河ヨステダール氷河に出かける。この氷河は標高1,957mであるが、大部分は標高1,600mの平らな平原を形成しており、いくつかの氷舌が谷間に降りてきている。

8時45分ホテルを出発。ソグンダルからフィヤールランドへ海岸から離れて谷間の道に行く。緩斜面に点在する農家、立派な畜舎が目につく。周りには牧草地が広がる（写真参照）。トンネルを抜けるとフィヤールランドである。このフィヤールランドトンネルの完成は1986年で、この地域の観光開発にとってきわめて重要な役割を果たすことになった。ここには1991年開設の氷河博物館がある。氷河登山のパノラマ映画の迫力はすごかった。博物館の屋上からは真正面に氷河が展望できる。博物館を出て小さな道を北に進むと、行き止まりに小さな支流フラット氷河があった。足下は残雪のようだったが、見上げると上の方は透きとおる氷だった。カップルが一組来たがすぐ帰った。他には誰もいない。帰り道、氷河のすぐ近くで、牛が放牧されていた。反対側に農家があり、家の前の畑には白いビニールに包んだ干し草がゴロゴロと並んでいた。かつては畑に棒を立てて干し草をつくっていたらしい。農家の隣の畜舎が

新しい。

ソグンダルへ戻ってもう一つの氷河へ。ガウベンから新しい道604号に入る。行き止まりの駐車場はさすがに人が多かった。ダイナミックな氷河が目の前に迫る。ヨステダール氷河から直接下りている舌端・ニガード氷河である。説明書によると、この氷河は1748年以來後退しており、現在は氷河の末端に氷河湖をたたえている。湖を渡るボートが動いており、対岸の氷河の麓へ。氷河の下からは川がゴウゴウと流れ出しており、木の橋を渡ると足をすくわれそうである。周りの圏谷からも滝がいくつも落ちていて氷河から流れ出る水のすごさを知った。末端の岩砕を昇ってようやく氷河にタッチできたのは30分後だった。氷河の上の方からトレッキングの人たちが降りてきた。アイゼンにピッケルの正装である。70歳代と思われる人もいる。ヨーロッパの人々の元気に脱帽だった。

<ベルゲンへ>

今日はヘルマンズベルクからソグンダル経由で再びフェリーで対岸に渡り、南岸を山越えをしながらベルゲンへと向かう。8時30分発のフェリーは何の合図もなく出発し、到着後車はそれぞれに出発していく。それぞれの責任で。ヨーロッパ流のやり方なのだろう。ラルダールから山道に入る。車は少ないし、氷河性の山は雄大で、谷は大きく山はなだらかである。頂上付近は氷河によって削られた高原面となっている。これはフィエルと呼ばれる。氷河、あるところは残雪、そして小さな湖。このあたり標高1,300m、それほど寒くはない。キャンプをしている人々がいる。我々も座り込んでお茶にする。その後、車を進めると広大な賽の河原が現れる。グランドモレンとのこと。標高900mを切るあたりから、やや低い湿地に続く草地では今も羊が放牧されている。よく見ると、放棄された夏の小屋が点在する。壊れて土台だけになったものもある。これが放棄された夏の牧場のひとつなのか。

急斜面のつづらおりになった道を一気に下

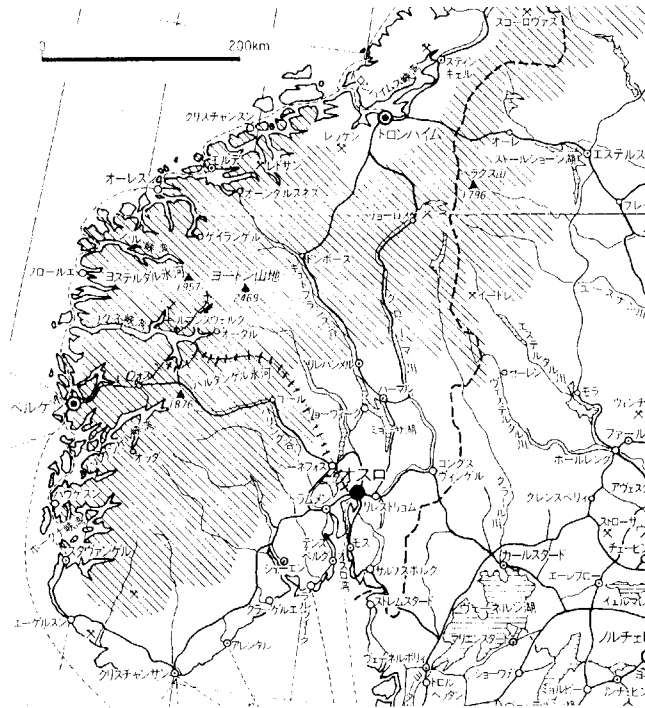
る。途中に何軒か農家があり、周りに羊が放牧されている。眼下に目をみはるようなフィヨルドの風景が広がる。アーウルランへ。1200年建立という石の教会がひっそりと立っている。説明書によると、イギリスの教会形式の影響がみられるとか。バイキングの時代、この地とイギリスの間に交流があったらしい。今も生きている教会。村の周りの畑では灌漑をしている。ビート・牧草・大麦・エン麦の世界。

トンネルを抜けて遊覧船の発着地点グドバンゲンへ入る。湾沿いの道を入れていくと行き止まりに小さなバッカの集落があった。村の後斜面は牧草畑になっており、若者が一人牧草の刈り取りをしていた。畑の境界はイギリスと同じ石垣である。ここでは斜面に直交して中腹で終わる。石垣が山裾を這い上がるように何本か並んでいる。我々は岸に座り込んで、小さな波紋を描きながらすべるように入ってくる遊覧船を眺めていた。昼を過ぎた頃、車はベルゲンへ向けて出発した。

#### 参考文献

- 立石友男(1987)「スカンディナヴィア」  
古今書院  
週刊朝日百科(1984)世界の地理28「中・北ヨーロッパ」朝日新聞社  
Brian S John(1992) FJAERLAND Hotel  
Mundal, A Norwegian Fjordside Settlement

主要農作物・万t	
1981～83平均	
小麦	7.7
ライ麦	0.3
大麦	60.0
エン麦	45.3
馬鈴薯	45.5
干し草	286.8
(立石 1987)	



ソグネフィヨルド

--- 筆者のルート  
(地図は立石1987による)



斜面に立つ農家 畜舎がひときわ目立つ。ソグンダル付近で。